

琉球語喜界島上嘉鉄方言のアクセント

白田 理人 (京都大学大学院修士課程)

琉球語喜界島諸方言は集落差が比較的大きく、アクセントについても名詞(及び動詞の活用形の一部)のデータによる集落差の記述及び分析が重要なテーマとなってきた。本研究は喜界島諸方言のうち上嘉鉄集落で話される方言について、述語(動詞・形容詞)の様々な活用等の新たなデータを提示し、これを含む一方言内の体系的記述を行う。

上嘉鉄方言は二型アクセント体系を持つ。先行研究(松森 1991・白田ほか 2011・窪園 2011・上野 2011)で名詞のアクセントパターンの記述はほぼ一貫しており、以下ようになる。α型は文節(=音韻語)末にHLHが、β型は名詞の次末拍に上がり目がくるようにHLHが現れる型と一般化できる。

表1 名詞の接続のアクセント(白田ほか 2011, 131 一部改)

名詞拍数	1	2	3	4
α 名詞単独	H	LH	HLH	HHLH
名詞+1 拍助詞	L-H	HL-H	HHL-H	HHHL-H
β 名詞単独	該当語彙なし	HH	LHH	HLHH
名詞+1 拍助詞	—	HH-H	LHH-H	HLHH-H

動詞も二型であり、α型は名詞同様音韻語末に上がり目が現れる型として一般化できる。β型について先行研究(上野・西岡 1994 など)では上がり目の位置を活用形の語末から数えて指定する方法が取られてきた。しかし、より長い活用形の調査の結果、動詞語幹の直後の接辞初頭拍に上がり目が現れると一般化した方が適切であることが分かった。

表2 β型動詞の接続のアクセント

動詞語幹拍数	1	2	3
動詞語幹+2 拍接辞	L-HH	HL-HH	HHL-HH
β 動詞語幹+3 拍接辞	L-HHH	HL-HHH	HHL-HHH
動詞語幹+4 拍接辞	L-HHHH	HL-HHHH	HHL-HHHH

上野・西岡(1995)では、喜界島諸方言全般に動詞継続相の活用形のアクセントの例外性が指摘されている。上野(2011)はその歴史的説明として二つの語の融合によってこの活用が生じたことを挙げている。継続相の活用の調査の結果、語幹+4拍以上では共時的にも2音韻語(語幹+2拍接辞+α型語)と同じ音調配列として現れることが分かった。

表3 動詞継続相のアクセント

動詞語幹拍数	1	2	3
α 動詞語幹+4 拍接辞	H-LHLH	HH-LHLH	HHH-LHLH
動詞語幹+5 拍接辞	H-LHHLH	HH-LHHLH	HHH-LHHLH
β 動詞語幹+4 拍接辞	L-HHLH	HL-HHLH	HHL-HHLH
動詞語幹+5 拍接辞	L-HHHLH	HL-HHHLH	HHL-HHHLH

・参考文献

- 上野善道(2011)「喜界島方言アクセントの調査と分析」(ms.)『NINJAL チュートリアル 第2回 琉球方言の調査・研究方法』2011.05.03 於 神戸大学。
- 上野善道・西岡敏(1995)「喜界島方言の動詞継続相のアクセント」『琉球の方言』18・19 合併号: 145-163。
- 窪園晴夫(2011)「喜界島南部・中部地域のアクセント」木部暢子・窪園晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子著『国立国語研究所共同研究報告 11-01 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』51-70。東京:国立国語研究所。
- 白田理人・山田真寛・荻野千砂子・田窪行則(2011)「琉球語喜界島上嘉鉄方言の談話資料」大西正幸・稲垣和也(編)『地球研言語記述論集』3: 111-152。
- 松森晶子(1991)「喜界島のアクセント交替」『日本女子大学紀要文学部』41: 123-138。